

〔論文〕

足尾鉍毒事件と早稲田大学

中 嶋 久 人

はじめに

本論は、明治期の東京専門学校―早稲田大学の関係者が、近代の環境破壊として著名な足尾鉍毒事件に対して、全体的にどのようなスタンスをとったのかということを、総合的に検討することを目的としている。『早稲田大学百年史』第一巻において、足尾鉍毒事件は天津事件とともに、東京専門学校講師および学生が公憤をあらわにした事件としてとりあげられている。そこでは、このように評価されている。

本学苑の講師および学生は、内に建学の精神を守りながら孜孜として勉学にいそしんだが、外は社会全般の事相に目を向けることも忘れなかった。政治を志す者の不断の心掛けとはいえ、その胸臆には絶えず公憤、義侠というものが脈を打っていた

のである。それが一度何かの事件に際会すると、奔流が一時に堰を切った如くにあふれ出し、学苑挙げての公憤となつて渦を巻いた。それは枚挙に遑がないほど、学苑外に波及し、遂に世人の目をそば立たしめ、輿論を席巻することさえあった。その良き例として今ここに天津事件と鉾毒問題とを取り上げる。⁽¹⁾

そして、具体的には、足尾鉾毒反対運動指導者田中正造の側近となつて活動した左部彦次郎^{さとりひこじろう}や、卒業後に田中正造に協力した木下尚江、学生とともに被害地の巡検を行つた講師安部磯雄など、足尾鉾毒反対運動に対する支援活動を行つた東京専門学校―早稲田大学関係者に力点を置いて叙述している。⁽²⁾

東京専門学校―早稲田大学関係者が、足尾鉾毒反対運動を支援したことは、本論で後述するように、確かなことである。しかし、その点のみに着目して、社会問題への公憤という観点からだけでみてよいのだろうか。『早稲田大学百年史』第一巻においても、田中正造が主張していた足尾銅山の即時鉾業停止につき反対であつたことが指摘されている。⁽³⁾ また、早稲田大学が寄付金を集める際、足尾銅山を経営していた古河市兵衛の一族や、古河財閥に就職した卒業生たちから、多額の寄付をもらつていた。一例をあげておこう。これも後述することになるが、一九一九年に早稲田大学は前年公布の大学令に対応する基金造成を目的として寄付を募集し、全体で一〇一万八九八〇円を集めたが、寄付金のトップは古河家三代目当主古河虎之助の一〇万円で、この額は岩崎小弥太（三菱）・三井八郎右衛門（三井）にならぶものであつた。また、東京専門学校卒業生で、当時古河財閥の重役であつた昆田文次郎も一万円を寄付しているのである。⁽⁴⁾

このように、東京専門学校―早稲田大学は、決して、足尾鉾毒事件に公憤の対象としてのみ接していたわけではない。むしろ、足尾鉾毒事件を引き起こした古河財閥に依拠して大学経営を拡大させた面もあるといえよう。

そこで、本論では、足尾鉍毒事件に対する、このような東京専門学校―早稲田大学の二面性を検討し、総体としてのどのようなスタンスをとっていたのかということを見ていくことにしたい。そして、そのことは、近代における東京専門学校―早稲田大学の位置を逆照射することになっていくと考えている。

I、足尾鉍毒事件とは

ここで、簡単に、足尾鉍毒事件の推移について概観しておきたい。⁽⁵⁾ 足尾銅山は、中世末から近世初頭において開山したとされている。近世において、足尾銅山は幕府が直轄していた。すでに、近世においても鉍毒被害はあったが、当時の生産技術では恒常的に生産量が保てず、さほど拡大しなかった。

明治維新後の一八七二年に足尾銅山は民間に払い下げられ、一八七六年に元小野組配下の売込商であった古河市兵衛が経営権を取得した。古河市兵衛は近代技術を導入し、一八八一年以降生産量が激増した。銅の生産は当時外貨獲得産業の一つであったが、足尾銅山が生産した銅は、そのうちでも大きな比率を占めていた。

しかし、足尾銅山の生産拡大につれて、これまで以上に鉍毒が渡良瀬川に流出し、沿岸漁業や農業に甚大な影響を与えることになった。また、足尾銅山上流部の森林が煙害や乱伐（燃料・坑木としての利用）のために失われ、下流部において洪水が頻発することになった。近代以前から洪水はあったが、それまでは単に水害になるのみではなく、上流部から肥料分を運んでくるものでもあった。しかし、近代以後は、洪水はより頻発し、その洪水は多くの地域で鉍毒をもたらした。いわば、水害と鉍毒のダブルパンチとなったのである。

鉍毒については、すでに一八八五年において渡良瀬川の漁業に被害があったことが新聞に報道され、一八八七年か

ら東京専門学校学生であった長祐之・須永金三郎らが公共的問題としてとりあげるにいたったが、そのことは後述する。農業への鉱毒被害が顕在化したのは一八九〇年の水害からであった。翌一八九一年に、田中正造は帝国議會衆議院において鉱毒問題について政府に質問した。ただ、この段階の鉱毒被害については、粉鉱採集機設置など一定の対策を前提にして、古河市兵衛が渡良瀬川流域の被害農村にある程度の金を支払うという示談がなされた。

しかし、一八九六年の水害は、古河の対策が無効であったことを露呈し、田中正造を指導者とする足尾銅山鉱業停止運動が開始された。ただ、一方で、足尾の地元からは鉱業停止に反対する請願が出されている。

一八九七年に、鉱毒地の被害住民は、被害地から東京までの請願・陳情デモである第一回「東京押し出し」を実施した。そして、政府は足尾銅山への予防工事命令や地租免除を打ち出したが、全面的な解決にはいたらなかった。

この「東京押し出し」は四回続けられたが、一九〇〇年の第四回「東京押し出し」は、被害地から東京へ向かう途中の利根川渡河点の川俣で警官隊によって阻止され、大量の逮捕者をだした。これは川俣事件とよばれている。その後、田中正造は帝国議會で、川俣事件を非難する「亡国演説」を行った。そして、一九〇一年に田中正造は議員辞職をし、明治天皇に鉱毒事件解決を訴える直訴を敢行した。

一九〇三年、政府は、被害地域の地価修正（地租の恒久的減額）を行うとともに、利根川・渡良瀬川流域の全面的な河川改修をほどこし、両川の合流点付近に遊水地を設置する方針を定めた。最終的に、鉱毒被災民たちの多くは、改修工事を支持することになり、群馬県側の地域は当時の政府の基盤の一つであった立憲政友会地の地盤となった。

この改修工事は、遊水地に指定された栃木県谷中村を犠牲にするものであった。一九〇六年、谷中村は廃村され、一九〇七年に強制立ち退きとなったが、一部住民は仮小屋をつくって住み続けることによって抵抗した。田中正造も、この時期は活動拠点を谷中村に移したのである。

一九一〇年、渡良瀬川改修事業が開始されることになった。一九一三年に田中正造は病死し、旧谷中村住民は一九一七年に移住した。とはいえ、鉱毒被害が終わったわけではなく、渡良瀬川流域の鉱毒被害は戦後まで続き、銅山の上流部の破壊された山林の回復は今でも進んでいないのである。

Ⅱ、足尾鉱毒事件に反対する早稲田の学生たち

①足尾鉱毒問題の顕在化と東京専門学校学生長祐之・須永金三郎

ここから、足尾鉱毒事件に反対した東京専門学校^①早稲田大学の学生たちの動向をみていこう。先でもふれたが、鉱毒被害の兆候が現れたのは、一八八五年頃のことであった。

『朝野新聞』一八八五年八月二日付に「香魚皆無」という記事が掲載された。そのなかでは渡良瀬川の特産物であった鮎の不漁や大量死が伝えられ、足尾銅山より流出した「丹礬」^{たんぱん}（硫酸銅）のためとされた。この記事は『下野新聞』一四日付にも転載されている。これが、足尾鉱毒問題の最初の新聞報道であった。

そして、『読売新聞』一八八七年八月五日付に「渡良瀬川に鮎なし」という記事が掲載され、その原因として銅山の鉱毒や銅山労働者の排泄物の流失があげられ、桐生・足利の染物業者が今後を憂慮していると伝えた。この記事に触発されて、当時東京専門学校に在籍していた須永金三郎（栃木県足利町出身）と長祐之（梁田村出身）らは、その秋の同校の行政学討論問題に「公共の利益と衝突する場合に農商務大臣は私人の営業を差止むることを得可きや否や」という課題を提起した。須永は、後に「是れ恐らくは斯問題筆舌に上せられたるの濫觴ならん」と回想している。^⑥

この二人は、その後も鉱毒問題に対する関心を持ち続けた。まず、長の場合をみておこう。^⑦一八九〇年一月一二日

に東京にて開催された下野青年会にも長は鉋毒問題を提起した。

前述したようにこの年の一八九〇年水害により、農業にも被害が出た。『下野新聞』一八九〇年一〇月五日付の「渡良瀬川の毒水」では、魚類減少だけでなく植物枯渇もみられているとし、その原因を足尾銅山の鉋毒に求めた。そして、長は、『下野新聞』一〇月一一・一二日に、漁業被害を中心とする「足尾鉋毒を如何せん」という論説を寄稿した。

長は、まず、「私益ハ公益に伴ふべし、私益を以て公益を害すべからず、私益を目的とすること若し公益を害することあらんか、社会公共の安寧幸福ハ得て保つべからず、国家行政の機関ありて之れが安寧幸福を保護し私益と公益とをして並び立たしめんとする、蓋し此に基かすんばあらざるなり」と述べた。

その上で、渡良瀬川における魚類減少の原因を足尾銅山の鉋毒に求め、それによる漁業の不振は公益を損害するものであり、私益による公益の損害であるとした。漁業不振が公益を損害する理由として、漁業に課せられた営業税の納税負担者である漁業者の減少に求めている。

さらに、このような「公共的事実」とは別に、「之を法律上より觀察せんか、古河氏の採鉋業は行政上から云ハゞ日本坑法に抵触せん、民事上よりせんか、是又権利の侵害と見做さるゝに至らん」と述べている。

ただ、長は、「古河氏にして法律上に抵触せんことを好まざるなり、飽まで徳義上の断定に依頼して公益の安全を得せしむるの策に出でられんことを希ふものなり」とし、具体的には「氏は年々足尾銅山より巨万の富を得ながら悲むべき害を渡良瀬川の下流に及ぼしたるの賠償として力の及ぶ工夫を凝らし銅滓と丹礬とを除去することに尽力せざるべからず」と提起した。

一方、行政官庁には「公益を保護し社会公共の安寧幸福を全ふせんことを力むるハ夙に卿等の責任なり」と求め、その上で、「嗚呼私益は尊みべし、又望むべし、公益を害する私益は制すべし」と再度主張した。

長祐之の議論は、一八九一年から鉱毒問題に関与することになった田中正造に先行するものであった。一八九〇年水害直後から、被害地地域の県会・町村会での鉱毒対策決議があげられていくが、その前提となったものといえよう。また、長は、古在由直・長岡宗吉が被害土壌の分析結果を掲載した『足尾銅山鉱毒 渡良瀬沿岸被害事情』を一八九一年に刊行した。本書は、発行直後に発禁処分となった。ただ、長自身は、その後、地域社会における古河などとの示談交渉を推進していくことになり、田中正造が指導者となる鉱毒反対運動に関わることはなかった。⁽⁸⁾

続いて、須永金三郎の場合をみておこう。須永金三郎は、一八八八年七月に東京専門学校を卒業し、博文館に就職した。一八九三年には博文館を退職して、地方出身の少年たちを対象とした雑誌『少年子』を刊行する右文社を発起した。さらに一八九五年には、郷里足利町にかえり、地域新聞である『両毛新聞』を刊行した。そして、現地で足尾鉱毒反対運動に挺身した。その一環で、足尾銅山鉱毒処分請願事務所・足尾銅山鉱業停止請願事務所を発行元とする『鉱毒論考第一編 渡良瀬川・全』を一八九八年に刊行した。東海林吉郎によると、同書は「足尾銅山による鉱毒の影響を科学的に示しつつ、政治問題として把握することをめざしたものであり、鉱毒反対闘争の理論的な基礎をうちたてる」ことを目的したものであった。⁽⁹⁾ このように、須永はその後も足尾鉱毒反対運動に関わったのである。しかし、『福井新聞』を経営することになって足利を離れ、運動から脱落した。東海林はその時期について一九〇〇年頃ではないかと推測している。

② 田中正造の側近となった卒業生左部彦次郎

田中正造の側近となって鉱毒反対運動に挺身する卒業生もいた。左部彦次郎はその一人であった。⁽¹⁰⁾ 左部は東京府京橋区木挽町の風間佐兵衛次男として一八六七年に生まれ、一八七九年に群馬県利根郡池田村奈良（現沼田市）左部宇

作の養子となった。左部の家は酒造家で、翌一八八〇年に酒蔵を他人に一時貸し渡した。

左部は東京専門学校の法科を一八九一年に卒業したが、在学中の一八九一年に鉱毒問題を知り、卒業後、被害地である群馬県大島村の小山幸八郎宅に寄寓しながら、鉱毒地を調査し、雑誌『足尾之鉱毒』の出版にかかわった。そして、一八九二年には田中正造と連絡をとりながら、渡瀬・大島・西谷田・海老瀬村と古河などの交渉に関与した。

これらの村々は、鉱業停止請願を農商務省に提出（一八九一年末）し、集団で上京して農商務省や古河市兵衛に圧力をかけ、さらに『毎日新聞』にこのことを報道させながら、群馬県会議長野村藤太の仲介により他地域よりも有利な示談をかちとった。このことについて、田中正造と連絡をとりながら、左部が関わったのである。¹¹ 渡瀬村・大島村・西谷田村・海老瀬村の村長は、左部に対し、一八九一年末の鉱業停止請願の提出につき「此レ実ニ公共義勇ノ志胸中に鬱勃タカヨリ発シタルモノト感謝ニ不堪被害地所有人民千百有余名代表者トシ、深く君カ義心ニ感謝シ聊カ冗言ヲ以テ茲ニ鳴謝ス」とする感謝状を送っている。¹² このことは、東京専門学校の『同攻会雑誌』一一号（一八九二年二月）の「校友左部氏感謝状を受く」という記事において次のようにとりあげられている。

足尾銅山鉱毒事件に就ては昨年中より沿岸被害地人民の激動一方ならず、各地其委員を選みて之を調査し、或は請願書を出たせしこと等は夙に世人の知る所なるが、校友左部彦次郎氏（群馬県利根郡池田村）は、過般私費を以て被害地の模様を調査し、鉱毒除害の請願書を農商務大臣に上申する等、該事件に尽力せしこと少なからずとて、去月下旬同県邑築郡渡瀬村々長外三村長より被害地人民千百有余名を代表する感謝状を受けたりと云ふ。

その後、左部は池田村に帰郷して結婚、酒造業にたずさわった。しかし、一八九八年、東京において被害民の谷元八より再び運動に参加するように勧誘を受け、被害地を再調査した上で、運動に参加することになった。田中正造の

側近として請願の提出を手伝い、ビラ・パンフレットの作成にもたずさわった。一九〇〇年の川俣事件に参加、逮捕され、法廷闘争を行っていた。

しかし、その間に家業は倒産し妻を失う悲運に見舞われた。左部彦次郎自身は被害地である群馬県館林である未亡人と再婚した。そして、一九〇四年以降に栃木県土木官吏に転身し、田中正造と対抗して谷中村破壊の先鋒となった。ただ、個人的事情だけではなく、谷中村買収などの治水事業が運動の効果であるという見方が左部の中で生まれていたということもあった。一九〇三年、前述のように政府は被害地域の地価修正と河川改修―谷中村廃村につながる―という方針を打ち出したが、六月一三日に左部は「鉱業ノ停止ハ之ヲ認メス：到底吾々ノ意思ノ貫徹ヲ見ルコト難シ」と指摘しながら、

然レトモ已ニ調査会ノ報告ヲ見ルニ至リタルハ吾々カ是迄ニ為シタル運動ノ効果ト云ハサルヘカラス、而シテ之レカ実行ニハ多額ノ費用ヲ要スルコトナレハ袖手傍観スルコトナク第十九議會予算編製ニ際シテハ一層十分ナル運動ヲ為シ、以テ実行ヲ速カナラシメサルヘカラス⁽¹³⁾

と述べている。すでに、この時点で、政府の施策を不十分ながらも運動の効果とし、その確保を志向する意識が生まれているのである。

その後、さまざまな地域で土木事業の監督官をつとめたが、妻子は館林に置いている時期が多く、左部もたびたび館林に帰郷した。帰郷した左部の行動について、再婚後誕生した左部の娘である左部春江（筆名大場美夜子）は、次のように回想している。

父は時折り休暇を得て戻って来ると翌日はきまって私をつれて、二里位はなれた早川^{さわがわ}田村の雲竜寺という寺へ墓詣りに行った。田中正造翁の墓があつたためらしい：参詣をすませると父はよくすぐ前を流れている渡良瀬川の畔を散策して冥想に耽るらしかった。又橋の上に暫く立つて、漸くものが分りかけて来た小学生の私に、私の生れぬ前の長い鉱毒事件の話をかいつまんで話して聞かせた。私は幼心に父を佐倉宗五郎のように偉いんだなど、振り仰いだ。館林へ戻る道々の畑で働いている人達といつても年寄りが多かつたが、父の姿を見とめると、みな寄つて来て、立話が始つた。それ等の人達は異口同音に、おかげ様でこうして働くことが出来ますと父に頭を下げた。私は自分が英雄になつたように嬉しかった。⁽¹⁴⁾

左部は、田中正造と対抗しても、田中正造への敬慕の念と、自身が足尾鉱毒反対運動へ挺身したことへの自負を持ち続けた。そのことは、被害地である館林の人々も忘れることはなかつたのである。

左部については、遺児の左部春江（大場美夜子）は、よく「裏切者」と印象をもたれることが多々あると指摘した上で「私は、そうは思わない。生きてゆく上には生活があり、生活には金がなければならぬ。その金がもう破産して父にはないのである」として、「又こうした父がなければ、私はこの世の中に私は生れてこないのであり、父が母との温い家庭にその運動家としての荒びた晩年を一寸の間でも送つたことを喜ぶと共に、如何に父が、自分自身被害農民でもないのに、正義の血をたぎらして、農民の力になつていたかを、資料の一部の感謝状によつて知つていただきたいと思う」と述べている。⁽¹⁵⁾

ある意味で、左部の生涯は、早稲田大学関係者の鉱毒問題に対する二面性を一身で体现したものといえよう。

③学生運動としての足尾鉱毒反対運動支援

続いて、東京専門学校Ⅱ早稲田大学在学生の、学生運動としての足尾鉱毒反対運動支援活動をみてみよう。

一八九九年、東京専門学校講師安部磯雄と岸本能武太は、足尾鉍毒地のフィールドワークを行った。その際、法律科学生武田三重郎他一名を随行させた。そして、武田は「足尾銅山鉍毒被害地の惨況に付て」というレポートを『早稲田学報』第三五号（一九〇〇年二月付）に寄稿した。武田は「予輩敢て既往を咎めず、今にして輒ち銅山の鉍毒予防工事を十分完全ならしむるか、又は其鉍業を停止して一刻も速く之を救済するの方策を講ぜずんは、啻に三十万の人民を犠牲に供し、関東六十有余里の沃野を挙げて百年不毛の地たらしむるのみならず、立憲帝国の本旨を傷つくる亦幾何ぞ」と述べている。

安部磯雄はその後も足尾鉍毒反対運動の支援を続けた。そして、早稲田では、安倍周辺の学生が鉍毒反対運動支援の発火点となった。

一九〇一年には、東京専門学校他東京の学生たちによる学生鉍毒地大挙視察というイベントが行われた。¹⁶ 前述の田中正造の直訴は二月一日に行われたが、その直後、鉍毒地救済婦人会より、学生たちが鉍毒被害地視察・演説会開催・義捐金募集などの運動を行うことが要請された。

そして、二月二七日に第一回学生鉍毒地大挙視察が行われた。参加者は、東京帝国大学・学習院・明治法律学校（現明治大学）・東京専門学校・慶應義塾・法学院（現中央大学）・哲学館（現東洋大学）・高等商業学校（現一橋大学）・高等師範学校（現筑波大学）・東京音楽学校（現東京芸術大学）・曹洞宗大学林（現駒沢大学）・日蓮宗大学林（現立正大学）・早稲田実業学校・正則英語学校（現正則学園高校）・国民英学会・開成中学・麻布中学・京北中学・立教中学などの学生であり、七〇〇〜一〇〇〇名程度の人数となったとされている。表①であげられている人員数はその一部であると考えられるが、その中では東京専門学校からの参加者数が際立って多いことがわかる。これらの学生に田村直臣（キリスト者）・安部磯雄・木下尚江らが同行した。

表① 学生鉱毒被害地視察参加者学校別員数
(1901年12月27日)

学 校	員数
本郷大学生（東京帝国大学）	60
高等学校生（第一高等学校）	50
専門学校生（東京専門学校）	258
明治女学校生	5
慶應義塾生	11
物理学学校生（東京物理学学校）	4
独逸協会生（独逸学協会学校）	12
国民英学生会生	8
正則英語学校生	9
立教学校生	36
明治学校生（明治学院）	15
明治法律学校	10
法学院生（東京法学院）	13
専修学校生	9
真宗大学校生（真宗大学）	20
計	520

（東京都公文書館所蔵「鉱毒事件ニ関スル学生路傍演説一件」より）

この視察は日帰り、上野から古河まで鉄道で行き、そこから、谷中村、群馬県海老瀬村に徒歩で向かい、再び谷中村から古河に戻り、そこから上野へ鉄道で戻るというルートであった。

古河に到着した時点で、被害民数百名にむかえられた。そして、「千余の同勢数十旒の旗押立て一里に跨る行列を以て進みたる壯観」と進み、谷中村と海老瀬村では被害状況を視察した。古河の協力

者と目された元谷中村長古澤繁治郎前では「『獣面獸身古沢繁治大賊』と大呼絶叫して此利口なる人の徳を賛嘆した」とシユプレヒコールをあげた。（『万朝報』一九〇一年二月二十九日付）

そして、一月三〇日に「鉱毒被害地学生大挙視察報告演説会」を神田青年会館で開催した。東京専門学校学生内田益三らが演説し、東京の学生を中心とした学生鉱毒救済会が設立された。

学生鉱毒救済会は、義捐金募集のための「路傍演説」を一九〇二年一月一日から実施した。事務局は木下尚江が記者をしていた毎日新聞社内に設置された。この「路傍演説」は、警察や明治法律学校当局が禁止を試みたが、継続された。

一九〇二年一月二六日には、第二回学生鉱毒地大挙視察が企画された。政府は禁止令を出したが二五〇名が参加し、

帰ってきた上野で「路傍演説」がなされた。

一九〇二年五月四日には、菊地茂（東京専門学校学生）・大亦楠太郎（明治法律学校学生）を中心にして学生鉅毒救済会は青年修養会へ改組された。その創立趣旨・会則では青年の修養を目的とするなどとしていたが、一九〇二～一九〇三年まで「足尾銅山鉅業停止意見発表演説会」を開催し、一九〇五年二月七日にも「谷中村買収反対大演説会」を開いている。弾圧をさけるためのカモフラージュだったと思われる。

それでは早稲田大学内部ではどのような状況だったのだろうか。⁽¹⁷⁾一九〇二年に東京専門学校創立二五周年記念祝典が開催され、さらに早稲田大学に改組された。それに際して、一〇月一九日に高木来喜・佐藤千纏・菊地茂らの発起により小野梓の追悼会が行われ、学内のサークルである「梓会」が結成された。二月三日には安部磯雄を会長として、高木来喜・菊地茂・佐藤千纏らを発起として早稲田大学雄弁会が結成されたが、梓会と会員が重なっていた。菊地茂は学生鉅毒救済会・青年修養会の中心的メンバーでもあった。さらに、一九〇三年一月二二日、早稲田社会学会が結成されるが、永井柳太郎・白柳秀湖・菊地茂も参加していた。鉅毒反対運動への学生の参加が学内サークル結成の基盤となったといえよう。

さて、ここにてでくる菊地茂であるが、彼は一九〇五年三月二六日に開催された早稲田擬国会（模擬国会）で普通選挙に関する建議案を提出した。⁽¹⁹⁾鉅毒問題に限らず、社会問題一般に関心があったといえよう。同年に早稲田大学を卒業し、『山梨日日新聞』・『東京毎日新聞』・『東京理財新報』・『山陰日日新聞』・『中国民報』・『中外商業新報』・『万朝報』においてジャーナリストをつとめた。そして、一九二四年頃、憲政会（立憲民政党）に入党し、同党の機関誌であった『憲政公論』・『民政』の主筆を担った。この憲政会を中心とする護憲三派内閣が一九二五年に普通選挙を実現しており、菊地茂は初志を貫徹したといえよう。

菊地は卒業後も谷中村などにいくなど、足尾鉍毒問題への関心は持続した。さらに、田中正造の著作などを編集した『義人全集』（一九二五—一九二六年刊行）の編集も担当することになった。友人としては、憲政会—立憲民政党の有力政治家であった永井柳太郎と、後述の卒業後に古河鉍業会社社員となった名取夏司であった。

また、高木来喜だが、彼は佐藤千纏とともに一九〇三年に早稲田大学を卒業したが、その後足尾鉍毒反対運動から離れたようで、一九〇三年一月以降は田中正造関係の資料には登場していない。一九〇八年には『静岡民友新聞』に入社した。それ以前は『静岡朝報』に関係していたようである。そして、一九一〇年には『茶業の友』（静岡県茶業組合連合会議所発行、同年中に『茶業界』に改称）主筆となった。しかし、一九一三年には、そこをはなれ、その年創立された『静岡新聞』主幹となった。基本的には、静岡県周辺でジャーナリストとして生きていったようであるが、社会問題についていまだ無関係ではなかったようで、一九一〇年に大逆事件で処刑された同郷（熊本県）の新見卯一郎に自身の近況を報告している。ある意味では、菊地茂に類似したライフコースを送っていたのではないかと思われる。⁽²⁰⁾

Ⅲ、大隈重信と田中正造

では、早稲田大学の創立者であった大隈重信は、足尾鉍毒問題にどのような姿勢でのぞんでいたのか。まず、大隈重信と田中正造は、ともに自由民権運動—立憲改進黨の同志としての意識をもっていたことを確認しなくてはならない。田中正造の葬式に大隈重信は弔詞（一九一三年一月二日付）をよせている。そこで、大隈は、

明治十五年（一八八二）立憲改進黨組織セラル、君栃木県ノ同志ヲ率ヒテ入党セリ。予ガ君ト相識リシハ此時ニ始レリ。君夙ニ民権ヲ主張シテ国会期成ノ運動ニ加ハリ、繼デ政党ノ拡張ニ努メ又自ラ衆議院ノ議場ニ立テリ、其憲政ノ為メニ尽瘁スルコト前後ヲ通ジテ殆ド四十年

と述べている。⁽²¹⁾ 大隈は一八八二年に立憲改進黨を創設して総理となり、その後、同党の流れをくむ進歩党・憲政党・憲政本党で主導的地位を占めており、田中正造もこれらの党に所属する衆議院議員であった。まさに、大隈と正造は同志であったのである。そして、大隈は「能ク渡良瀬沿岸数十万無告ノ民ヲ救済セリ」とも述べ、田中正造の死の直後には、彼が足尾鉾毒反対運動に尽力してきたことを評価している。⁽²²⁾

他方で、田中正造も、一九〇〇年二月一七日に衆議院で行ったいわゆる「亡国演説」のなかで、大隈が首班となった第一次大隈内閣（一八九八年）について「今日ノ政府ハ即チ諸君ノ政府ナリ、又我々ノ政府ナリ」とその当時述べたとしている。⁽²³⁾ とりあえずは評価していたのである。そして、田中正造の足尾鉾毒問題に対する多彩な議員活動も、大政党である立憲改進黨に所属していたから可能になったと考えられる。

しかし、足尾鉾毒問題対策について、大隈と正造は意見が一致せず、あつれきを起こしていたようである。田中正造死没直後の一九一三年九月八日、大隈重信は柴田三郎のインタビューにこたえて「鉾毒問題が始まった頃、わしが、鉾毒に不熱心だと云つて、或時、鉾毒の土を、新聞紙に包んで、持つて来て、庭の盆栽に、ぶちまけた、どうも弱つたね」と回想している。⁽²⁴⁾

特に、一八九六年前後のあつれきは激しかったようである。前述のように、田中正造が主導する形で足尾鉾毒反対運動が活発化するのは一八九六年からであるが、その時期は、大隈が外務大臣として入閣する第二次松方正義内閣

(一八九六年九月一日—一八九八年一月二日)の時期でもあった。当時、大隈は明治政府の一員でもあった。

しかし、田中正造は大隈の鉅毒への姿勢を評価しなかったようである。当時、足尾鉅毒問題は農商務省の管轄で、農商務相をつとめていた榎本武揚は鉅毒被害民に同情的であったが、一八九七年三月二十九日に辞任し、その後任に大隈が農商務相になった。このことに対して、田中正造は尾崎行雄宛書簡(一八九七年三月三〇日付)「犬養馬鹿、尾崎馬鹿、イカナレバ伯を農商の大臣とせしハ馬鹿の馬鹿、大馬鹿三太郎よりも大馬鹿なり…尚此七、八月之頃ハ、ドウモ伯ハ免職となるの予言なり」と述べ、大隈の農商務相兼任の根回しをしたと考えた大隈側近の犬養毅・尾崎行雄などを批判したのであった。⁽²⁵⁾

さらに、田中正造日記(一八九八年一月二日付)では「大磯ニ而大隈伯ニケ年ト一ヶ月目ニテ面会、始末書ヲ呈す。鉅毒談忽ち座上を破りて、大勢のために追ひ出たざる」と書き留められている。⁽²⁶⁾大隈の議論の内容ははっきりわからない。ただ、大隈は維新直後から鉄道開設をはかるなど殖産興業化—近代化政策には熱心であり、明治政府の一員でもあって、正造のいう足尾銅山の鉅業停止に同調できなかったのだと考えられる。そのことが、両者のあつれきの原因となったと推察されるのである。

とはいえ、鉅毒問題を離れると、大隈と正造との人間的な関係は続いていた。田中正造は、一九〇八年に早稲田大学で講演を行った。その際、正造は、次のように述べている。

△今日、早稲田で昼飯の御馳走になりましたが、大隈が『田中君、何故そんなに髪を長くして居るか』と聞くから、『何故、君はそんな坊主のように短く刈るのだ』と言ふた所が、大笑でしたが、『何もソウ態と延ばして居るにも及ばんじや無いか』と言ひますから、『否や、僕は亡国の民だ』と答へてやりました。何もワザと髪を延ばしたわけでは無い、僕の居る村は亡国で、

理髪屋と云ふものも無いから、こんなに延びたのだ、延ばしたのじゃ無い、自然に延びたのだと言ふてやりましたが：（田中正造「海陸軍全廢」、『新生活』第五号、一九〇八年四月五日）⁽²⁷⁾

大隈と正造は、意見対立がない限り、軽口を言い合う関係でもあったのである。ある意味では意見対立はあっても互いを認める対等な人間関係であった。

Ⅳ、古河に就職する早稲田の卒業生たち

①古河合名会社理事長になった昆田文次郎

東京専門学校―早稲田大学の卒業生にとって、有力な就職先となったのが、古河財閥であった。古河財閥に就職した東京専門学校―早稲田大学の卒業生で出世頭となったのは、昆田文次郎であろう。昆田は東京専門学校邦語法律科に一八八二年六月から一八八五年七月まで在学した。東京専門学校―早稲田大学における新潟県出身の学内団体である越佐会に創設時（一八八三年）から参加し、卒業後も終生関与した。東京専門学校を卒業した後の一八八六年に代言人資格を取得し、一時期は郷里の新発田において法律事務に従事したが、一八八八年に上京し、東京専門学校創設者の一人である岡山兼吉の岡山法律事務所に入所した。岡山兼吉は一八八九年より古河市兵衛の顧問となった。そして、昆田は古河家の訴訟を担当することになった。当時弁護士をしていた原嘉道は「当時（一八九三年頃：引用者注）、昆田君は岡山兼吉氏の法律事務所に居つたので、同事務所では、昆田君と小林豊太郎君とが岡山氏の下に古参株で、訴訟事件を分担して居たので、古河家の事件は、昆田君が岡山氏の代理として担任して居りました」と回想してい

しかし、岡山兼吉は、一八九四年五月二八日に死没した。岡山没後も暫時岡山法律事務所は続けられた。この時期の昆田は、不老倉鉾山事件で古河の代理人として三菱の代理人であった星亨と相對するなど、古河の法律顧問として役割をはたしていた。そして、原は、次のように回想している。

足尾に烟害問題が起つた事があります。それは屋外で硫黄で生松葉を燃してそれで鉾石を溶解させるので、烟が夥しく出るといふので騒ぎになつたのであります。此事件は訴訟になりそうな形勢でありましたが、ならずに済みました。之は、岡山兼吉氏が死亡後で、植村俊平君が其後を引受けて法律事務所を継続した時代でありました。此時は昆田君も相談に与り、菊地武夫君、植村俊平君と昆田君、私と四人一所に足尾へ実地視察に出かけたのであります。⁽²⁹⁾

この「烟害」も鉾毒の一部であつたといえよう、このように、この時期の昆田は、古河市兵衛の法律顧問としての役割を忠実に果たしていたのである。

この昆田が、古河市兵衛に正式に雇われるのは、一八九七年一月からであつた。その事情を、同僚弁護士であつた植村俊平は、次のように回想している。

：明治二十九年末に至り、岡山法律事務所なるものは之を閉鎖する事となりました。其際私は昆田君に向ひ弁護士の職を罷めて古河翁の店務に従事することを勧めました。併し之は私が昆田君が弁護士として不適任であると思つた為ではなく、商店員としてならば更に一層適任であると信じたからです。処が君も亦疾く其意向があつたらしく、直に私の勧誘を容れられました。依て私は一日古河翁に面会して、昆田君の爲めに其事を懇談した処が、翁は直ちに之を快諾されたので、何んでも翁も亦夙くから其事を希望して居られたものと思はれたのです。つまり之は古河翁の昆田君に対する信頼が厚かつたからの事と見ら

れるのです。⁽³⁰⁾

古河市兵衛に雇用され、古河商店三等副支配人になった時、昆田は弁護士時代のトレードマークであった髭を剃り落とし、縞の羽織に前掛けをかけ、商人としての装いで出社したと記憶されている。⁽³¹⁾

その後、昆田は一八九七年七月から十二月まで古河鉱業事務所文書係長をつとめ、一八九八年一月から一九一三年一月まで古河鉱業事務所庶務課長として働いた。古河に入って、まず行ったことは、足尾鉍毒反対運動対策であったと考えられる。後で詳述するが、東京専門学校を一九〇三年に卒業して古河財閥に入った崎山刀太郎は次のように回想している。

昆田先生が、明治三十年（一八九七）の鉍毒問題の時には、古河へ入社したばかりの課長といふ眇たる地位でございましたが、政府筋に対して連絡を取った唯一の重要人物であつたのです。夫れと申すのは、当時は松隈内閣時代で、大隈党の錚々たる人士中には昆田さんの母校たる早稲田専門学校関係者も居たのですから、昆田さんは、連絡者として絶好の地位に立つた事でせうと思ひます。⁽³²⁾

その他、一八九八年時点で、鉍毒問題で大隈や田中正造が属した立憲改進黨―進歩党のライバルであつた自由党の新潟県における関係者に働きかけを行おうとしたり、鉍毒停止措置寸前までいった際、当時の衛生局長であつた後藤新平に無理やり面会したなど、足尾鉍毒反対運動にたいするいわば政治工作を行つていたようにも見受けられる。⁽³³⁾

ただ、田中正造が定宿にしていた芝の信濃屋という宿屋の主人を籠絡した、私立探偵の岩井三郎を使つた、奥田義人らの政府委員が足尾鉍毒被害地視察をした際に隠れてついていったなど、熱心に活動していたさまは語られている

が、具体的に何をしていたのかは判然としないのである。⁽³⁴⁾

足尾鉍毒反対運動対策以外としては、一九〇七年の足尾暴動の鎮圧に尽力したことが伝えられている。⁽³⁵⁾その他、庶務課長時代の昆田の日常的な業務について、市島謙吉はこうのように述べている。

昆田君は功を急がず、地位よりも仕事を重んじ、名は課長であつても、実権上には理事同様であつた様子で、古河会社の内部に紛紜があつたり、先輩の間の軋轢があつたりするのを適宜に捌いて行くのが皆な昆田君の課長時代の役目であつたらしいのです。往年足尾の鉍毒事件の際には、古河家の当主（三代目当主古河虎之助）は未だ幼くして、爾来昆田君を師父の如く重んじて来たといふ点から見ても、昆田君が万年課長として会社の内部を治めた事は、其の美しい性格から来た事であらうと思ひます。故に、万年課長といふ綽名は昆田君の誉れであると言ひたいのであります。⁽³⁶⁾

実際、古河家三代目当主古河虎之助は、昆田の死（一九二七年）について「第二の親を喪した」と述べている。⁽³⁷⁾

一九一三年まで、「万年課長」といわれるように、昆田は庶務課長という、比較的低い地位にいた。しかし、一九一三年に古河合名会社の理事となり、頭角を現した。この年は奇しくも田中正造が死去した年であつた。その後、合名会社古河鉍業会社専務理事（一九一七・一二―一九一八・四）、古河鉍業株式会社専務取締役（一九一八・四―一九二〇・六）、古河鉍業株式会社取締役副社長（一九二〇・六―一九二一・一）などをへて、最終的には、古河合名会社理事長（一九二一・四―一九二七・二）と、古河財閥のトップに登りつめたのである。⁽³⁸⁾

②早稲田出身の古河鉍業社員名取夏司・崎山刀太郎

早稲田大学教授坂本三郎は「明治四十年（一九〇七）前後に、昆田君は私の処へ、早稲田出身の人才を古河の会社

に採りたいからと言つて来て頻りと周旋されました。その時は法律の人を求め、二人ばかり採用してもらいました。私に其人選を托されたので、私が推薦したのは必ず採用して呉れたのです」と回想している。³⁹ 昆田は、将来の古河財閥を担う人材を早稲田大学にもとめたのである。

その一人が名取夏司である。名取は早稲田大学大学部政治経済学科へ一九〇二年九月に入学し、一九〇五年七月に卒業した。名取は大山郁夫と永井柳太郎と同級で、大山には母校を背負う道を、永井には政治家への道を希望していたという。⁴⁰ また、前述の菊地茂とも親しかった。一九〇五年に菊地茂が普通選挙に関する建議案を提出した擬国会では、大山・菊地・永井・名取の四名が同じ「第一部」議員に所属し、大山はその部長をつとめている。⁴¹ 学卒業後まで続き、名取は菊地の死後（一九三三年）、その遺児たちの面倒をみたという。⁴² このエピソードは、足尾鉾毒反対運動支援の側にたつた菊地と、古河鉾業に就職し足尾鉾毒反対運動抑圧の側になった名取が、立場は違つても心情を通わせていたことを垣間見せており、興味深い。名取は在学中の一九〇四年に結成された早稲田清韓協会に参画（後の早稲田支那協会）し、卒業後は海外・特に清国・韓国との間の貿易に従事したいという意向を有していた。この名取を、古河にさそつたのが昆田文次郎であつた。その際について、このように伝えられている。

彼れ（名取）が初志を変して古河に入つたかについては、面白いエピソードがある。といふのは、当時早稲田出身の先輩の有志が、新しく同門を出た後進を招いて、一夕卒業の祝賀やら、仲間になる歓迎の意味を表すために、御馳走する慣例があつたので、此の年の卒業生も卒業式のあつたその日、先輩団から芝公園の紅葉館に招かれた。そして、先輩後進が早く懇親になるやうにと先輩後進交互に座すといふ風になつてゐた。この時名取君は偶々古河の昆田文次郎の隣りに座してゐたので、初対面ながら両者の間に懇話が交されて居る中に、昆田の炯眼に認められ、又その真摯な態度と巧妙な説得に感じ、其の後熟慮の結果、竟に清韓貿易に従事する宿志を抛つて古河会社に入つたのである。⁴³

名取は、卒業式の日には昆田にスカウトされ、一九〇五年に古河鋳業に入社したのである。

入社してしばらくは本社庶務課・会計課や本所熔銅所などを名取はまわったが、一九〇六年に本社にもどってきた。その際は、「今度は別に専任の係を命ぜられず、庶務、会計等いづれの用務でも必要に応じて手伝はされ、殊に昆田課長の機密の用務に多く用ゐられてゐた」とされている。⁽⁴³⁾当時の同僚であつた赤崎鋳一は「当時名取君は遊軍のやうな立場で、しかも何んでも一人前以上やり遂げるので重宝がられ、殊に昆田課長の命令で随分外部の交渉や、立案など、高等政策にまで関与させられてゐたやうに思ふ」と回想している。⁽⁴⁵⁾

名取は、一九〇七年には秋田県の阿仁鋳業所（鋳出）の内局経理課長となり、一九一三年には阿仁の太良支山の主務（支山長兼経理課長）に転勤になった。

そして、一九一七年には、古河が桂川電力株式会社と提携して創立した旭電化工業株式会社に主事として入社した。当時の旭電化工業は苛性曹達や晒粉を製造する会社であつた。翌一九一八年には支配人となり、一九一九年には旭電化工業の取締役となつた。名取は一九三二年まで同社取締役を続けるとともに、一九二六年から帝国生命保険株式会社専務取締役となり、一九三九年の死まで続けたのである。⁽⁴⁶⁾

名取と同時期に早稲田から古河鋳業に入社した者としては崎山刀太郎があげられる。⁽⁴⁷⁾一九〇三年に崎山は東京専門学校英語政治科を卒業し、早稲田大学研究科（大学部政治経済学科得業生と同資格を得る）に、一九〇三年から一九〇五年まで在籍した。そして、古河鋳業社員に一九〇五年になった。古河での経歴はわからないが、前述のように、昆田文次郎の職務について回想しており、一時期なりとも昆田の下にいたと推測される。一九一七年に古河鋳業の尼崎工場長となり、翌一九一八年に古河鋳業が経営に参加していた日本電線株式会社専務取締役となつた。そして、一九二六年には東京製線会社取締役会長を兼務し、一九二八年には日本電線会社社長（一九三一年に大日電線株式会社に改名）・

東京製線会社取締役社長となった。この両社の社長を死去する一九四三年まで続けたのである。

③古河に就職経験がある早稲田大学の教授 はやしきみお 林癸未夫

早稲田大学卒業生の就職先として、古河は有力な選択肢であり、既に述べてきた三人以外の早稲田大学卒業生たちもかなり多く就職したであろう。その中には、また、早稲田大学にもどって教鞭をとる者もいたのである。ここでは、林癸未夫をみておこう。

林癸未夫は一九〇一年に東京専門学校高等予科に入学し、一九〇二年に早稲田大学法学部法学科に進学し、一九〇五年に卒業した。林は、早稲田大学に入学して心ひかれたものは「文学」と「社会問題」であり、ゆえに卒業後の進路を準備することがなかったと後に回想している。特に社会問題について、当時は社会運動の黎明期であり、矢野龍溪『新社会』（一九〇二年）や安部磯雄『社会問題解釈法』（一九〇〇年）などの労働問題や社会問題に関する書物を貪り読み、社会思想家たちの演説会や矢野龍溪の社会問題講究会などにも度々出席したと述べている。そして、林は「当時田中正造が衆議院で叫びつゝけてゐた足尾の鉍毒問題に刺戟されて、都下学生有志の被害地視察団が出向いた時も、私はその一行に加はつて、栃木県の農村を駆け歩いた」としている。⁽⁴⁸⁾

とはいえ、林は煩悶した。林は「次第に社会問題の理論や現実に関する知識が増し、熱情が加はるにつれて、私は社会問題に身を投ずることが、恰も自分の宿命でもあるかの如く感ずることを制し得なかつた」のであつたが、「しかし社会運動は勿論職業ではなかつた。まづ生活の途を求めなければならぬ私に取つて、社会運動は余りにも荊棘の途であつた。それは生活ではなくて闘争であつた。この不断の闘争の中を敢然進んで行けるといふ自身を私は持ち得なかつた」と回想している。

文学にせよ社会運動にせよ、そのような道を選ぶことはできず、また、官吏や弁護士になろうという気持ちにもなれなかった林は、次の道を選んだ。

だが、卒業した以上、是非とも自活の途を求めなければならぬ。何はさておき下宿料くらゐは自分で稼がなければならぬ。さうしたのつぎきならぬ必要は、私をして曾て訪問したこともない同郷の先輩井上公二氏の門をくぐらせた。この人は当時古河鋳業会社の会計課長であつたが、同じ会社の庶務課長であつた母校の先輩昆田文次郎氏と相談の上、とりあへず私は会計課員として採用されることになつた。月給僅に十九円であつた。私と同年度の卒業生で、私と前後して同じ会社に入つたのは名取夏司、小野義夫、崎山刀太郎、佐藤吉六郎、相馬和雄等の諸君であつた。⁽⁴⁹⁾

林の選んだ卒業後の進路は、古河鋳業への就職であつたのである。

前述のように、昆田は一九〇七年の足尾銅山労働者の暴動である足尾暴動の鎮圧に尽力したが、林にとって、足尾暴動は大きな転機となつた。足尾暴動後、古河にとつての当面の急務は「鋳夫の雇傭及待遇方法に一大刷新を加へることであつた」が、そのため、林には次のような任務が与えられることになつた。⁽⁵⁰⁾

私（林）はその際労働問題の研究を主たる任務として本店から足尾に転勤せしめられたばかりでなく、爾後古河在勤中の十数年間、私の勤務場所と肩書とは再三変更したにも拘らず、私の従事した職務は殆ど常に労働問題の調査研究に終始し、且それが必然的に社会問題一般に関する私の関心を深め、知識を博くし、遂に私をして実業界を去つて学界に入らしめ、社会政策及社会思想の学徒として後半生を送らしめる機縁となつたからである。学生時代に私をひきつけた二つのもののうち、文学はますます私から遠去かつたが、社会問題は予想しなかつた経路をへて私に復帰したわけである。私は自身社会運動には従事しなかつた。しかし、私は社会問題を鋳山や工場に於ける自己の体験を通じて心に刻みつけることができたのである。⁽⁵¹⁾

林は、足尾暴動を契機に、労働問題に関する企業内研究者になったのである。そして、それは、労働者の雇傭や待遇方法を刷新することを目的としており、その意味では、社会問題を解決するということにつながっているといえよう。

そして、第一次世界大戦は、日本だけではなく世界各国で社会運動が激化する契機となった。林は、日本の社会運動の激化について「西洋に於ける理論の受売であり、欧米に於ける運動の模倣であることは分つてゐた」が、「しかし、さうであればあるほど西洋に於ける社会理論及社会運動の実相に触れることは、この問題の研究に没頭する私に取つては制し難い願望であつた」と回想している。⁽⁵²⁾そして、二、三の先輩の好意によって、一九二〇年から一九二一年にかけて、林は「米・英・独・仏・伊等の諸国を歴遊し、或は大学の講堂に、或は鉱山・工場の事務室に、或は社会党や労働組合の本部に、或は労働争議中の街頭に、或は各種の出版物や新聞・雑誌の記事に、能ふ限りの研究資料を蒐集して帰ることができた」と述べている。⁽⁵³⁾林は欧米留学をはたしたのである。

留学の時点で、林はいまだ古河鉱業社員であつた。しかし、「帰朝後間もなく私は新生涯に入つた。それは過去の実業界との因縁を絶つて学界の末班に列することとなつた」のであつた。⁽⁵⁴⁾留学後、林は早稲田大学政治経済学部講師となり、その後、教授、図書館長、政治経済学部長、理事、常務理事、総長代行などの早稲田大学における要職を歴任した。他方で、『中央公論』一九二二年八月付に『伊太利に於ける工場占領騒動の顛末』という論稿を寄稿し、ジャーナリズム上でもデビューしたのである。⁽⁵⁵⁾このように、古河鉱業社員であつたことが、ある意味で、林の研究者としての土台となつたといえよう。

そして、林は、『社会政策新原理』（早稲田大学出版部、一九二六年）において、有産者階級と無産者階級の対立を漸進的に廃止することを目的とした国家による国家のための政策として社会政策を位置づけることを提起し、さらに

表② 古河社員の早稲田大学における役職

昆田文次郎	名取夏司	崎山刀太郎
東京専門学校評議員（1891.7-1893.7、1896.7-1898.7）／早稲田大学評議員（1902.7-1903.12）／早稲田倶楽部幹事（1915.9-1917.12）／「早稲田騒動」収拾に尽力（1917）／早稲田大学維持員（1917.9-1927.1）	早稲田大学校友会幹事選出（1919.2）／早稲田大学校友会常任幹事（1922.5-1931.4）／早稲田大学評議員（1925.4-1939）／早稲田大学維持員（1929.6-1939.3）／早稲田大学監事（1933.11-1939.3）	早稲田大学維持員（1929.6-1943.12）

（「早稲田人名データベース」より）

『国家社会主義原理』（章華社、一九三三年）において、階級国家観を否定し、すべての社会を超越する一元的国家論（国家至上論）に基づいて、国家社会主義原理を構築することをこころみ⁵⁶た。このような林の提起は、当時の思想状況に基づいているといえるが、彼の前半生の経験も寄与しているといえよう。

④ 早稲田大学を支えた古河関係者たち

早稲田大学と古河財閥との関係は、単に卒業生たちの有力な就職先というだけにとどまらなかった。古河財閥に入社した早稲田大学の卒業生たちは、積極的に早稲田大学をささえていたのである。このことを、さきにあげた昆田文次郎・名取夏司・崎山刀太郎を中心にみていこう。

まず、彼らが卒業後早稲田大学でどのような地位になったのかをみていこう。早稲田大学教授となった林癸未夫と違って、彼ら三人は早稲田で教鞭をとることはなかったが、法人としての東京専門学校―早稲田大学においては、枢要な地位にいた。まず、昆田文次郎であるが、東京専門学校と早稲田大学において三回評議員をつとめている。この時期の評議員会は『教則』の改定、事務組織の改編、学費改定、教育過程の改編、学科や研究科等の新設、地方巡回講演の実施、新事業の策定等々、教学・経営両面に亘り重要事項を決定⁵⁷する機関であった。最高議決機関といえるであろう。早稲田大学へと改称した後の一九〇三年には維持委員会が設けられた。この維持委員会

は、従前の評議員会の権限を継受しつつ、理事・会計監督を選出する権限を付与されており、「学校経営に最も重要な機能を果たすところの最高議決機関」であつた。⁽⁵⁸⁾そして、従前の評議員会は、重要事項を決議する権限を喪失し、校長・学監から学事と会計の報告を受け、それを承認することが主要な機能となつた。

昆田の場合、最高議決機関である維持員会の維持員となつてゐる。その他、一九一五年に創設された校友クラブである早稲田倶楽部（後に永楽倶楽部と改称）の幹事もつとめてゐる。

名取夏司の場合は、校友会幹事・同常任幹事をへて、評議員となり、維持員となるというコースをたどつた。特筆すべきことは、会計監督の役割をはたしてゐたと思われる監事に就任したことである。この地位は昆田を凌駕するものであつた。崎山刀太郎も、途中経過はわからないが、維持員までのほりつめた。

そして、彼らは、早稲田大学が新規事業を行う、また大々的に募金を必要とするなどの場合は、積極的にその委員となつた。彼ら自身も多額の寄付金を出した。その第一人者は、やはり昆田文次郎であつた。昆田は一九〇七年に大学内で大隈重信銅像が建立された時、名取ともに銅像建設委員に選出され、さらに昆田は銅像建設常任委員となつた。⁽⁵⁹⁾

一九一七年に、高田早苗と天野為之を中心に早稲田大学が二分された早稲田騒動が勃発した際に、昆田は事態を沈静化させることに奔走した。⁽⁶⁰⁾後に総長となる早稲田大学教授田中穂積は「勿論其の以前からも愛校の念が厚かつた事は誰しも認むる処で、何か学校の問題とか、会合とかには必ず、見えられて相当尽力されたものですが、大正六年（一九一七）後は、学校を自分の学校の如くに大切に守り立て、下されたのです」と回想している。⁽⁶¹⁾実際、彼が最高議決機関である維持員会の一員となつたのは早稲田騒動の時なのであつた。

また、翌一九一八年、大学令公布により、他の私立大学同様に、早稲田大学も多額の大学基金（基本財産）の創設

表③ 大学基金 1 万円以上寄付者（1920年 5 月現在）

寄付金額	氏 名
10万円	岩崎小弥太 三井八郎右衛門 古河虎之助
5 万円	原富太郎 高取伊好
3 万円	村井吉兵衛 山下亀三郎 松平頼寿 茂木惣兵衛
2 万円	神田鐔藏 山本条太郎 増田義一 藤田平太郎 渋沢栄一
1 万 5 千円	前島弥
1 万円	八馬兼介 服部金太郎 日清生命保険株式会社 朽木嘉郎・朽木寿夫 小倉常吉 大原孫三郎 大橋新太郎 勝田銀次郎 横山隆俊 横山章 田中四郎左衛門 内藤久寛 中村房次郎 渡辺襄夫 久原房之助 増田増藏 小池国三 近藤廉平 昆田文次郎 安部幸之助 浅野総一郎 森田退藏 森村開作 杉田駿 住友吉左衛門
(寄付金総計101万8980円)	

（『早稲田大学百年史』 第 3 巻』 44頁）

おわりに―「市民の大学」としての早稲田大学の二面性

にせまられ、一九一九年に大規模な募金活動を実施したが、その際、昆田自身も一万円寄付し、その主人である古河虎之助も一〇万円寄付している⁶²。この時の募金総額は約一〇一万円であったが、この二人だけでその一〇%をしめているのである。

さらに、一九二一年、大隈重信が死去したが、昆田は、その死後に大隈家から大隈邸と庭園を受贈する委員をつとめている⁶³。

そして、昆田死後（一九二五年）も、名取夏司と崎山刀太郎は積極的に寄付金に応じていたとみられる。一九三七年から行われた皇紀二千六百年奉祝創立六十周年記念事業への募金において、名取は五千元、崎山は七千元を寄付している⁶⁴。また、前述したように、名取は早稲田大学の監事を引き受けたが、早稲田大学を受取人とする一万円の生命保険契約を結び、一九三九年に彼が死去した際には早稲田大学が保険金を受領することになったのである⁶⁵。

東京専門学校―早稲田大学が足尾鉍毒事件にむきあうスタンスは二面性をおびていた。足尾鉍毒事件は近代文明の影の部分としての側面を有しており、それを告発する田中正造や鉍毒被害民たちの運動を、東京専門学校―早稲田大

学の学生・教員・卒業生の一部が熱心に支えていた。

他方で、足尾銅山は日本の近代化をささえていた産業の一つであり、古河も大企業として成長を続けていた。たぶん、その意味で大隈重信は田中正造に同調しえなかったのであろうし、多くの卒業生が有利な就職先として選んだであろう。古河側も積極的に早稲田大学卒業生をリクルートしたのである。そして、早稲田大学自体もまた、古河から大学をささえる資金・人材を提供され、発展していった。

これは早稲田大学だけの問題ではない。日本近代市民社会総体が、足尾鉍毒事件に対して二面性を有していたといえよう。例えば、田中正造のもとで足尾鉍毒反対運動を闘った被害民たちの多くは、政府の打ち出す河川改修に賛成し、廃村される谷中村を見殺しにした。その一人が左部彦次郎であった。いわゆる市民社会には「市民」が国家権力に抗して権利を主張するという側面と、産業化⇨近代化をはかるといふ側面の二面性があるが、それは足尾鉍毒事件のはしほしで見受けられる。

とはいえ、早稲田大学には、この二面性が著しく表出されている。東京専門学校―早稲田大学は、国家権力に対抗して市民の人権を確保する自由民権運動の申し子としての「市民の大学」として創立したが、他方で、産業化・近代化する市民社会に人材・知識を提供する「市民の大学」でもあったのだ。このことは、ある意味で、民権では田中正造の同志でありながら、足尾鉍毒事件では対抗せざるをえなかった大隈重信のありように示唆されているように思われる。そして、この二面性は現代にも継承されているのである。

註

- (1) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第一巻(早稲田大学、一九七八年)八五五頁。
- (2) 齊藤英子「田中正造とともに闘った父菊地茂」(齊藤英子編『菊地茂著作集』第一巻(早稲田大学出版部、一九七七年)、小松裕「足尾鉾毒問題と学生運動」(『文学部論叢』第六五号、熊本大学文学会、一九九九年)、小澤隆司「足尾鉾毒事件」をめぐる社会状況と大学・卒業生・学生の動向」(『プロジェクト研究』第三号、早稲田大学総合研究機構、二〇〇八年)も、政府に対抗して足尾鉾毒反対運動を支援する側から主に描かれている。
- (3) 『早稲田大学百年史』第一巻八七二―八七三頁参照。
- (4) 同右第三巻(一九八七年)四四頁参照。
- (5) 足尾鉾毒事件の全体像については、中嶋久人「三・一一からの歴史学―産業革命期の足尾鉾毒問題から考える」(東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のために―現在をどう生きるか―』、岩波書店、二〇一七年)や館林市史編さん委員会編『館林市史』通史編三(館林市、二〇一七年)を参照されたい。
- (6) 須永金三郎「鉾毒論考第一編 渡良瀬川・全」(足尾銅山鉾毒処分請願事務所・足尾銅山鉾毒停止請願事務所、一八九八年。東海林吉郎・布川了編『足尾鉾毒 亡国の惨状』、伝統と現代社、一九七七年に収録)六四頁。
- (7) 長祐之については、栃木県史編さん委員会編『栃木県史』通史編八(栃木県、一九八四年)、小松裕「田中正造の近代」(現代企画室、二〇〇一年)を参照した。
- (8) 長祐之の足尾鉾毒問題における仲裁活動の経緯については、中嶋久人「足尾鉾毒反対運動と示談交渉―初期鉾毒問題へのポリティクスをめぐる―」(館林市役所館林市史編さんセンター編『おはらき 館林市史研究』第四号、二〇一二年)三三―三五頁を参照されたい。
- (9) 東海林・布川前掲書三〇八頁。なお、須永金三郎については、同書の東海林吉郎「付録 須永金三郎略伝」に依拠した。
- (10) 左部彦次郎の足尾鉾毒運動への挺身については、とくにこだわらない限り、田村紀雄「左部彦次郎」(田村『渡良瀬の思想史』、風媒社、一九七七年)を参照した。
- (11) この示談交渉の詳細については、中嶋前掲「足尾鉾毒反対運動と示談交渉」を参照されたい。ただ、この時期すでに足尾銅山鉾毒停止を主張していた田中正造にとって、この結果はある意味で不本意なものであった。
- (12) 大場美夜子『残照の中で』(永田書房、一九六九年)一〇一―一〇二頁。
- (13) 館林市史編さん委員会編『館林市史』資料編六(館林市、二〇一〇年)二四六頁。
- (14) 大場前掲書五一頁。
- (15) 大場前掲書一〇一頁。
- (16) 東京全体の学生による足尾鉾毒反対運動への支援活動の

詳細については、とくに断らない限り、小松前掲「足尾鉍毒問題と学生運動」八五～八九頁を参照されたい。

- (17) 早稲田大学内での活動については、斉藤前掲書四二七～四七九頁を参照されたい。

- (18) 菊地茂の人生の詳細についてはその遺児である斉藤英子の前掲書を参照されたい。

- (19) 『早稲田大学百年史』第二卷（一九八一年）四五三～五四頁。

- (20) 高木来喜については、小松前掲「足尾鉍毒問題と学生運動」九二～九六頁を参照されたい。一九一三年以降の高木の動向については不明である。

- (21) 田中正造全集編纂会編『田中正造全集』別巻（岩波書店、一九八〇年）四二四～四二五頁。

- (22) 同右四二五頁。

- (23) 『田中正造全集』第八卷（一九七七年）二八九頁。

- (24) 柴田三郎編『義人田中正造翁』（敬文館、一九一三年）一一〇頁。

- (25) 『田中正造全集』第一四卷四九一頁。

- (26) 『田中正造全集』第一〇卷五頁。なお、一八九八年一月二日条に書き留められているが、いつ起きたことかは判然としない。

- (27) 『田中正造全集』第四卷六〇五～六〇六頁。

- (28) 薄田貞敬編『昆田文次郎君の生涯』（後昆会、一九二九年）一二七頁。昆田については、おおむね同書と「早稲田

大学人名データベース」を参照した。

- (29) 同右一三〇頁。

- (30) 同右一三一～一三二頁。

- (31) 同右一六一頁参照。

- (32) 同右一七六頁。

- (33) 同右一七七～一七八頁参照。

- (34) 同右一七九～一八〇、二〇八頁参照。

- (35) 同右二一四～二四頁。

- (36) 同右二四三頁。

- (37) 同右五四〇頁。

- (38) 同右五～八頁。

- (39) 同右二二五頁。

- (40) 難波理一郎『人間名取夏司君』（氷川書院、一九四一年）七一頁。

- (41) 前掲『早稲田大学百年史』第二卷四五三～四五九頁参照。

- (42) 斉藤前掲書四六八頁。

- (43) 難波前掲書七七～七八頁。

- (44) 同右七九頁。

- (45) 同右。

- (46) 同右三一～三一五頁参照。

- (47) 崎山刀太郎については、古河虎之助君伝記編纂会編・発行『古河虎之助君伝』（一九五三年）、エピソード稲門の群像編集委員会編『エピソード 稲門の群像 一二五話』（早稲田大学出版部、一九九二年）、「早稲田大学人名データ

ベース」参照。

(48) 林癸未夫「回顧と感想」(中村佐一編『戦力と厚生』、文松堂出版、一九四五年)三〇九頁。

(49) 同右三一〇頁。

(50) 同右。

(51) 同右三一頁。

(52) 同右。

(53) 同右三二頁。

(54) 同右。

(55) 同右参照。

(56) 早稲田大学大学史資料センター編『早稲田大学学術研究史 社会科学部門』(早稲田大学、二〇〇四年)四五、五六―五七頁参照。

(57) 『早稲田大学百年史』総索引・年表(一九九七年)一〇〇頁。

(58) 同右一〇四頁。

(59) 『早稲田大学百年史』第二卷二二九頁参照。

(60) 同右参照。

(61) 薄田前掲書三〇四頁。

(62) 『早稲田大学百年史』第三卷四四頁参照。

(63) 同右一七二頁参照。

(64) 同右八四六頁参照。

(65) 難波前掲書二九三―二九四頁参照。